

歌よ川をわたれ

沖井千代子

絵 こさか しげる



歌よ 川をわたれ

沖井千代子・作／こさかしげる・絵



沖井千代子

歌よ 川をわたれ

講談社 1980

253p 22cm (児童文学創作シリーズ)

おきい ちよこ

歌よ 川をわたれ

昭和55年 2 月10日 第 1 刷発行

定価980円

著 者 おきい ちよこ
沖井千代子

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話 東京03(945)1111(大代表)

振替 東京8-3930

印刷所 廣済堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

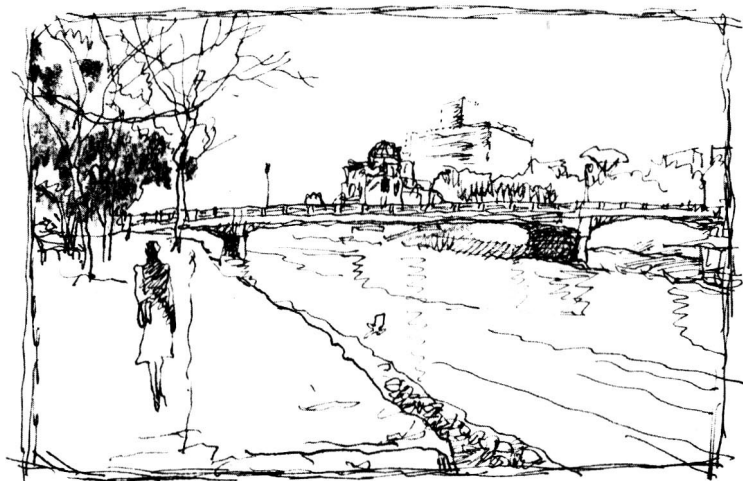
© Chiyoko Okii 1980 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8093-190086-2253 (0)

(児一)

この物語を^{ものがたり}
広島^{ひろしま}でやかれた
たくさんの母と子に
ささげます



* もくじ

1	新しい町へ……………	4
2	戦 ^{たたか} いの火ぶたはきられた……………	23
3	がいかはわれに……………	51
4	ぼうさん、ぼうさん、どこへいく……………	72
5	えいえい、おうおう、ならば、こい……………	92
6	上 ^{じやうりくさく} 陸作戦、はじめ！……………	114
7	しゅろの花さく……………	132



12	11	10	9	8
水にうつる火……………	燃える町……………	ほのおの日……………	さいごのかくれんぼ……………	いくらかまんじゅう、もみじかね……………
226	200	181	164	147
あとがき……………				
252				



1 新しい町へ

「いまは山なか、いまははま、いまは鉄……あつ、鉄橋だ！」
まさ子がさけびました。

妹のゆり子と、とも子も、列車のまどから、からだをのりだしました。

ゴー！

歌も声も、夏の川風にふきとばされました。

おかあさんはそばのざせきで、そんなにぎやかな三人を、にこにこして見ていました。おとうさんはこれからはじまる、新しいくらしのことを考えていました。

昭和十六年の夏。

佐山一家の五人は、ひっこしの列車の中にいました。

にぎやかな歌声といっしょに、汽車は西へ走っていました。



三人は列車の行く手を見ました。左に夏の瀬戸内海が光り、そのむこうに、入道雲がわきあがっていました。

これから住む新しい町は、どんな町でしょう。三人の心も、期待で、入道雲のようにふくれあがりました。

三人がひっこしを知ったのは、この夏のはじめのことでした。

その日、げんかんわきの地面にかがみこんでいるゆり子に、とも子がいいました。

「おねえちゃん、ちよっとおいでって。」

「だめ。いま、いそがしいの。」

ゆり子は国民学校二年生。小学校のことを、ことしから国民学校とよぶことになりました。とも子はようち園です。

「親分がよんでるよ。」

「親分が？　いま、だいじなところなのになあ。」

地面ではたくさんのありが、うろうろしています。

ゆり子は、ゆり子の作ったありのすを、三つもっていました。いま、四つめを建設中です。ありのすの作り方は、ひみつ中のひみつで、ゆり子はだれにも教えていません。

どんなにして作るのかというと、ゆり子はまず一ぴきありを見つけ、それからたどってありのすを

見つけます。

ありのすが見つかると、そのそば、十五センチくらいはなれた地面を、スコップでやわらかくほり返します。それからゆり子は、スコップをもちなおして、ありのすのはしにスコップをさしこんで、思いきり力を入れて、ありのすをひっくり返すのでした。

ゆり子がすの中をそつとさがすと、たいてい死んだ虫が三つくらいでてきました。それを新しくほった土の上におき、ときにはおまけに台所からさとうをぬすんできて、いっしょにおいてやります。うろうろしていたありたちは、やがてやわらかい土地とごちそうを見つけて、新しいすづくりをそこではじめるのでした。

「親分が待ってるよ。」

「どこで？」

「ぶらんこにおいでつて。」

（これはきつと、なにかひみつの話だぞ。）

ゆり子は思いました。ゆり子は先にたつてうら庭へむかいました。

ゆり子もとも子も、春がおわってから秋までのうら庭がきらいでした。そこに一人でいるというだけで、親分をそんけいする気持ちになりました。

うら庭には、ぶらんこのそばに、のき下のあらかべにそつてたきぎおき場があります。去年の夏、黒いへびがそこでひなたぼっこをしていました。だから、そこがきらいなのです。

そのうら庭で、親分は、うしろむきにぶらんこに乗っていました。親分というのはまさ子のこと
で、まさ子は国民学校四年生でした。

二人が近よると、まさ子は、ぱつとふりむきました。

「ひゃあ、おばけえ！」

まさ子の顔を見て、二人はさけび声をあげました。

白いひたいの下に、大きなおかしな形の、二つのみどり色の目がありました。おばけは、「く、く、
く。」とわらいました。

まさ子のわらい声なのでよく見ると、目と思つたのは木の葉で、葉の下のはんものの目は、まんま
るいどんぐり目でした。

「ひいらぎの葉っぱよ。」

まさ子は上まぶたと下まぶたをつっぱっている、木の葉をとりました。ひいらぎのとげとげのある
葉の、先とつけ根で目につっぱりをしたので、どんぐり目になったのでした。

「びっくりした。」

「もうおばけかと思つた。」

二人はいつて、親分のひたいの白いガーゼを見ました。ばんそうこうで止めてあります。

きのう、まさ子とゆり子は、自転車で二人乗りをしていました。まさ子は近くの、小田川の川土
手から坂道をくだるとき、ペダルをふまなくても、国民学校の門の前までいくことを知っていました。

「はっ 坂の上からあ 学校へ 見ればあ……。」

まさ子はゆり子に乗せて、両手ばなしでうたいながら坂をくだっていました。

おかあさんが、すこしは女の子らしくなるようにと、まさ子に習わせているおことの歌、

「はっ 高い山からあ 谷底へ 見ればあ

うりやなすびのう 花ざかり……。」

そのかえ歌でした。

「あつ、おことの先生！」

坂の下におことの先生が見えました。おことの先生は目が見えなくて、つえをついています。

「あ、あ、もうだめだ。しょうとつだ！」

両手ばなしの自転車は、きゆうには止まらず、まさ子が目をつぶったとき、自転車は先生の前をかすめて、学校の門柱にしようとして止まりました。

ひたいのガーゼは、そのときのけがです。

「いったい、なんの用……。」

いいかけてゆり子はまた、悲鳴をあげました。

「ぎゃあ、へ、へびよ！」

これにはさすがの親分もとびあがりました。

ゆり子の指さすところに、たきぎにひっかかって、うすい紙のようなものがありました。



「な、なによ。へびのぬけがらぐらいで、そ、そんな声だして。」

まさ子はつばをのみこんでつづけました。

「へびはいま、服をぬいでおふろにはいつているところよ。それにいまはそんなことでさわいでいるときじゃないの。ないしょの話があるの。」

まさ子はひそひそ声でいいました。

「いまからいう話、ぜったい、だれにもいうちゃいけんよ。うちはね、こんど、ひっこしすることになったの。」

ゆり子とも子は、さっきのまさ子のように、どんぐり目をしました。

「おとうさんが病院小屋をやめて、よその町へいくことになったの。ゆうべ、おとうさんとおかあさん、話してた。」

「へえ、で、どこへ？」

「元柳町じやって。」

「それ、どこ？」

「うん、まだ学校じゃ習ってないけどね。」

まさ子は小さい二人に、いばつていいました。

「地図で見てもよう。」

三人ともはやくこの場所をはなれたかったので、意見は、すぐにいっちしました。

三人がそつと勝手口から家へはいると、ふろ場でおかあさんがせんたくをしている水の音が聞こえました。そのそばをすりぬけてへやへはいると、三人はまさ子のつくえのそばへきました。

まさ子は日本地図をとりだして、「岡山県」のところを広げました。

「ここが、矢掛。」

「なんだ、こんなちっぽけなところ？」

ゆり子は不満そうにいいました。

岡山とか倉敷には大きなしがついているのに、みんなの住んでいる小田郡矢掛町のところには、小さなしがついていない。そこからは赤い細い線が井原を通り笠岡という海べの町へつながっていました。

「これが、井笠鉄道。」

まさ子はいばつて、すこしまえに習ったばかりの線を指さしました。

三人はマツチはこのように小さい、一両だけの軽便鉄道が、ブービーとバスのように走っているすがたを、目にうかべました。

「それで、元柳町というの、どこ？」

「岡山県じゃないようよ。どこにもないもん。」

「そしたら、ねえ、どこよ。」

「そんなにいわんでよ。わたしじやって、まだ岡山県までしかならうとらんもん！」

まさ子は「中国地方」というところをさがしました。

「元柳町、元柳町……。」

まさ子は引きだしから虫めがねをだして、さがしてみました。地図のうしろの、地名のところでもさがしました。見つかりません。

「きっと、矢掛よりももっと小さい、いなかの町なのよ。地図にもものっていないような。」

三人が地図をとじて顔をあげると、おかあさんが、せんたくもののバケツをもって、ふる場からでてくるのを見えました。

それから十分のち、ゆり子は自転車をとばしていました。

（おとうさんが、病院小屋をやめるんだって？）

病院小屋というのは、この町の町立病院のことです。

まえ、この町には、町はずれの小田川のそばに小さな避病舎がありました。小田川はつきみそうがさき、ほたるがとぶきれいな川です。避病舎というのは、伝染病がでたとき、ほかの人につらないようにはなして収容するところで、人々はそこをかくり小屋とよんでいました。

そのころ、町に病院がなかったので、病人かでるとみんなこまりました。そこで町ではかくり小屋をとりこわして、そこに町立の病院をたてました。町の人々は、かくり小屋のあとにたった病院を、病院小屋とよびました。そして、そこへやってきた医者、三人の子どもたちは、病院小屋のまさちゃん、ゆりちゃん、ともちゃんとよばれました。

病院小屋のまさ子は、男の子みたいで、いつもけんかときは親分でした。一週間まえにも男の子が五、六人うちへきて、おかあさんに、

「まさちゃんが男子をいじめるで、おこつておくれやあ。」

そういったものでした。

ゆり子は、おしゃれでおしゃまで、おしゃべりでした。とも子はなき虫のよわ虫で、いつも目のまわりと鼻の下が、ぬれていました。

ゆり子は、なかよしのさっちゃんの家へ、自転車をとばしているのです。

さっちゃんは、家の前のたんぼのあぜにいました。

「さっちゃん！」

よびかけると、さっちゃんは手で、しずかにするように合図をしました。

「だめじゃなあ。せつかくつれそうじゃったのに。」

さっちゃんは草のほで、かえるをつっていました。雨上がりのたんぼは、池のように水がいっぱいで、うき草のかげからのぞいた、とのさまがえるの目玉が二人を見ていました。

「あのなあ、ないしょの話があるの。」

しゃべつてはいけないといわれたのに、ゆり子はもう、しゃべりなくなっていました。

「うち、ひっこしするんよ。」

さっちゃんはびっくりして、うき草のかげのかえるそっくりの顔をしました。

「どこへいくの？」

「元柳町なの。」

それがどこなのか、さっちゃんはききたかったのですが、ゆり子がだれでも知っているような顔でいったので、たずねるのはよしました。

「そうなのかあ。ゆりちゃん、元柳町へいつてしまふのかあ。」

さっちゃんはちよつとさびしそうに、あぜに目を落としました。あぜには、うすも色の小さなてのひらを広げて、あぜむしろの花がたくさんさいっていました。

矢掛は小さな軽便鉄道の、終点の町でした。

たんぼのつづくむこうにガソリンカーが一両すがたをあらわすと、ゆれながらだんだん近づいてきて、小さなこの町の駅につくのでした。

このガソリンカーは、乗りおくれそうなとき電話をかけてたのめば、すこしなら待つてくれました。

「あのなあ、病院小屋の院長さん、いま、手術やつとるそうじゃあ。発車が、ちいとおくれるわあ。」
駅長さんは、大きなやかんから番茶をついでのんでいる運転士さんにいました。

折り返し始発になるガソリンカーは、青田のにおいのする生あたたかい風をまどから入れながら、ひっそりと止まっていました。

そんな小さな町じゆうに、

「病院小屋の佐山先生がやめるらしい。」